



Title	完訳アラブ古詩集の構成について
Author(s)	池田, 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2021, 19, p. 45-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106148
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

完訳アラブ古詩集の構成について

池田 修*

〔校正者のまえがき〕

池田修訳『ムファッダリーヤート試訳』は、今号で掲載が終了した。この間、訳了後の見直しを進めていた先生の健康に不測の事態が生じた。細かい字の校正に視力が堪えず、関西アラブ研究会で先生の後を継いだ高階に、会誌14号（2016）掲載の詩 No. 46 以降の校正と未掲載の原稿が託された（2015/7/27）。ムアッラカートとムファッダリーヤートの試訳を見直した『完訳』を、原文と共に出版とのご希望は今日では難しく、『完訳』出版用に預かった原稿も今回掲載することにした。先生が指定の『完訳』本の構成では、両詩集の「テキストと訳¹⁾」以外は以下のとおり。

はじめに

第1部：ムアッラカート詩集

まえがき

テキストと訳²⁾

第2部：アラブ古詩解説³⁾

1. ジャーヒリーヤ時代

1.1. はじめに

1.2. ガッサーン王国

ガッサーン王家の系譜

1.3. ラフム王国

ラフム王家の系譜

1.4. キンダ王国

2. 「北アラブ」と「南アラブ」

2.1. はじめに

2.2. 南・北アラブの対立抗争

2.3. アラブが戦った日々

3. ジャーヒリーヤ時代の文学

3.1. はじめに

3.2. 詩と歌

3.3. 詩の編集

3.4. 庇護民の活躍

4. 主な古詩集とムアッラカート

4.1. 8世紀後半の主な古詩集

4.2. ムアッラカートの概要

5. 主な参考資料

第3部：ムファッダリーヤート

テキストと訳⁴⁾

あとがき

※ 原文と日本語の配置は、原文・日訳の順、左右対照のいずれも可。

* 大阪外国語大学 名誉教授

1) 両詩集の本体「テキストと訳」は、会誌既刊号分を PDF（訳者が見直す前のもの）で公開済みである。URL は以下のとおり。https://sites.google.com/view/kansai-arab/

2) 〔校正者注：アラビア語テキストは指摘済みのミスを修正し、詩人の掲載順は以下のとおりとする：1) Imru' al-Qays, 2) ʿArafa, 3) Zuhayr, 4) ʿAntara, 5) ʿAmr, 6) al-Hārith, 7) Labīd〕

3) 〔校正者注：この第2部は、ムアッラカートのあとがきとムファッダリーヤートのまえがきを兼ねたもの。一部は会誌に掲載済みの記事の、改訂増補である。〕

4) 〔校正者注：注3を参照。No. 29 までにおいて、アラビア語テキストは会誌掲載のもの（ただし、修正指示あり）、日本語は「見直し原稿」による。No. 30 以降は、どちらもミス修正のみ。〕

—— 完訳アラブ古詩集の構成 ——

はじめに⁵⁾

アルムアッラカート⁶⁾の試訳は、関西アラブ研究会の会誌『関西アラブ・イスラム研究』第3号（2003年）より同会誌『アラブ・イスラム研究』第7号（2009年）まで掲載した。また、アルムファッダリーヤートの試訳については、翻訳自体は既に完了しており、前掲の会誌への掲載は7号より開始されたが、126篇と補遺4篇から成るため、すべての公刊までには少し時間を要する見込みである。

しかし、訳了してから時間を利用し公刊済みのテキストを再検討したところ、修正や補足追加など気づくところが多々あり、練り直し⁷⁾の機会となったことは、むしろ幸いであったと感じている。

2016年1月11日 池田 修

第1部：ムアッラカート詩集

まえがき

イスラーム以前、すなわちジャーヒリーヤ時代、西暦6世紀に活躍した代表的詩人7名の長詩1編ずつを集めたアルムアッラカート al-Mu^ʿallaqāt と呼ばれる詩集は、アラブ文学史上、定型長詩（カスィーダ qaṣīda）の最高の模範と見なされている。この時代のアラブ古詩は、アラブの部族社会の文化、社会の組織ならびにその思想を探るうえで欠くことのできない情報源と見なされ、古来、アラブの歴史記録 Dīwān al-^ʿArab だとして重視されてきた。

この詩集はもともと『7編のカスィーダ』 al-Qaṣā'id al-Sab^ʿ al-Ṭiwāl という名で知られていたが、後になると、アルムアッラカート「吊るされたもの」とかアッスムート al-Sumūt「首飾りの糸」またはアルムザッハバート al-Mudhahhabāt「黄金の文字で書かれたもの」などと呼ばれるようになった。アルムアッラカートというタイトルが最初に現れるのは、アブーザイド・アルクラシー ʿAbū Zayd al-Qurashī（10世紀）による『アラブ詩全集』 Jamhara ʿAash^ʿār al-^ʿArab という作品においてであるが、この頃になると、これらのタイトルの本来の意味が忘れられ、新たに由来説話が語られるようになったらしい。本来の意味とは、首飾りのように、貴重な詩の傑作集

5) [校正者注：訳者がムアッラカートとムファッダリーヤート両詩集の完訳出版を期し、記した。]

6) [校正者注：詩集「アルムアッラカート」と「アルムファッダリーヤート」の名称は原文に即した文脈では冠詞「アル」が付されているが、日本語の文脈では概ね、「アル」はない。]

7) [校正者注：訳文を練り直した部分は、ムアッラカート全体と、ムファッダリーヤートの冒頭から No. 29 まで。それ以降は、校正ミスのみ修正。]

であったと推測される。しかし10世紀頃になると、「アラブの詩人たちは毎年、メッカ近くのウカーズの定期市で開催される詩人大会に参加し、最優秀作に選ばれた詩がエジプト製亜麻布に黄金の文字で書かれカーバ神殿に吊るされた」と語られるようになった。

アルムアッラカートに登場する詩人は以下の7名である。イムルウルカイス Imru^o al-Qays (6世紀)、タラファ・ブヌ・アルアブド Ṭarafa b. al-ʿAbd (569年頃没)、ズハイル・ブヌ・アビー・スルマー Zuhayr b. ʿAbī Sulmā (609年没)、アムル・ブヌ・クルスーム ʿAmr b. Kulthūm (6世紀)、アンタラ・ブヌ・シャッダード・アルアブシー ʿAntara b. Šaddād al-ʿAbsī (6世紀後半)、アルハーリス・ブヌ・ヒッリザ al-Hārith b. Ḥilliza (6世紀)、および、ラビード・ブヌ・ラビーア Labīd b. Rabīʿa al-ʿĀmirī (661年没)。

なお、以上の7名に以下の3名の詩人を加えて10名とする者もある。アルアアシャー・マイムーン・ブヌ・カイス al-ʿAʿshā Maymūn b. Qays (629年没)、アンナービガ・アズブヤーニー al-Nābigha al-Dhubyānī (6世紀)、および、ウバイド・ブヌ・アルアブラス ʿUbayd b. al-ʿAbraṣ (554年没)。

カスィードは一定の韻律と脚韻で統一されている。詩は上の句と下の句で一行をなし、30行から100行ぐらいのものが大部分を占めている。原則として一行で意味を完結させることになっているが、例外もある。完成された長詩においては、通常3種のテーマについて順次詠まれる。まず冒頭では、かつての恋人と楽しい日々を送った住まい跡を訪ねて追憶に泣く。この部分はナスィーブ *nasīb* と呼ばれる。次いで、この追憶を振り払うように、詩人はラクダに慰めを求める。ここではラクダの頑強さや駿足ぶりが、砂漠に住むカモシカ、野生のロバ、牛、ダチョウなどと比較されながら語られる。ナスィーブとラクダを語るのは常套的なものとなっている。最後に、詩人の主張が詠まれる。この最後の部分が長詩のメインテーマをなす。自己や自部族の栄光を誇るか、敵対部族を風刺するか、有力者を褒め称えるものが多い。

アラブ古詩は、記憶力抜群のラーウィーと呼ばれる職業的口伝家によって代々語り伝えられ、ウマイヤ朝になってから編集され始めたとされている。アルムアッラカートは、アブー・アルカーシム・ハンマード・ブヌ・アビー・ライラー・アッラーウィヤ ʿAbū al-Qāsim Ḥammād b. ʿAbī Laylā al-Rāwīya (695-772) という口伝家が編者だとされている。通称では、ハンマード・アッラーウィヤと呼ばれている。アッラーウィヤ *al-rāwīya* は、ラーウィー *rāwī* 「口伝家」に強調接尾辞 *-a* がついて「大口伝家」を表し、ハンマードのあだ名とみられる。この語はもともと水を入れた皮袋を運ぶラクダをさすのに用いられていたが、のちに詩を暗記して語り伝える者を表す専門用語となったものである。

ハンマードは砂漠のベドウィン社会に入り込み、語り伝えられているアラブ古詩をことごとく収集暗記し、ウマイヤ朝後期のカリフらに語り、莫大な賞金を得たとのことである。しかし、彼に関する人物評には信じられないようなことが伝えられている。有名な『歌の書』*Kitāb al-Aghānī* の著者アブー・アルファラジ・アルイス

バハーニー (897-972) が同書の中で伝えるところによれば、ハンマードは泥棒や無頼漢の一人であった。ある日押し入った家でメディナの住民 (アンサール) の詩を内容とする一巻の書を見つけ、これを読んですっかり感心し、以後は生活態度を改め、アラブの言語や詩や故事を学び、この方面での大家になった。またアルムアッラカートと双璧をなすアラブ古詩集『アルムファッダリーヤート』*al-Mufaḍḍalīyāt* の編者アルムファッダル・アッダッビー *al-Mufaḍḍal al-Ḍabbī* (およそ786年没) は、「アラブ詩はハンマードによって修復不可能なほど損なわれた。」と言ったとのことである。アルムファッダルはハンマードとともにイラクのクーファを拠点に活躍した同時代の学者であるが、おおよそ次のように批判している。ハンマードは古詩を詠むに当たって古詩の作者を間違えたとか語彙を取り違えたという程度のものではなかった。彼は古詩やアラブの言語に通じ各詩人の特徴や考え方をよく知っていた。それに基づいてそっくりの詩を自ら作り、昔の詩人の作品に混ぜ合わせた。その結果、彼我の区別ができなくなった。

アルムファッダルのこのような批判がどの程度正しいものかを判断することは今日では容易ではないが、両者がライバル関係にあったことを考えれば、学問上の嫉妬心に触発された批判という部分も多少は伺える。さらに根本に立ち返れば、ハンマードが編者だと言い伝えられているだけで、これを確証する資料はない。

この翻訳の底本は、次の文献である。

- (1) Ibn al-ʿAnbārī, ʿAbū Bakr Muḥammad: *Sharḥ al-Qaṣāʾid al-Sabʿ al-Ṭiwāl al-Jāhiliyyāt* (ed. by ʿAbd al-Salām Muḥammad Hārūn, 1969, 2 ed., Cairo).

また作業を進めるうえでは、以下をも参考にした。訳注などで A とあるのは (1) を、T は (2) を、Z は (3) を表す略字である。

- (2) al-Khaṭīb al-Tibrīzī: *Sharḥ al-Qaṣāʾid al-ʿAshr* (ed. by ʿAbd al-Salām al-Hāwfi, 1987, 2 ed., Beirut).

- (3) al-Zawzānī: *Sharḥ al-Muʿallaqāt al-Sabʿ* (ed. by ʿAbū ʿAbd Allāh al-Ḥusayn b. ʿAḥmad, Beirut).

- (4) Arberry, A.J.: *The Seven Odes*. London, 1957.

なお、イムルウルカイスとタラファについては、伴康哉氏による論文「イムルウルカイスとその作品」(東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所、イスラーム文化に関する共同報告 No. 3) で24行が、「悲劇の宮廷詩人タラファ」(日本オリエント学会紀要、オリエント14巻、No. 2) で34行が訳されており、本訳ではその大部分をそのまま借用させていただいた。

(ムアッラカート) テキストと訳

第2部 アラブ古詩解説

1. ジャーヒリーヤ時代

1.1. はじめに

イスラームが起こるよりも前の時代はジャーヒリーヤ時代と呼ばれている。この呼称はイスラームの聖典コーラン *al-Qurʾān* に由来する。コーランではジャーヒリーヤという語が4回用いられている。その48章26節では「背信者たちが彼らの心中に獐猛な心、つまり無明時代の獐猛な心を抱いたとき、神は使徒と信者たちに安らぎをくださったもうて、自制のみことばをしっかりと持たせたもうた」とある。すなわち、いまだ神の啓示が下されていなくて、偶像崇拜が広く行われ、部族間の闘争が絶えまない時代を指して用いられている。従って、理論的に言えば、アラブの歴史が始まってからイスラーム時代を迎えるまでの長期間がジャーヒリーヤ時代ということになる。

しかし、アラブの最古の文学と見なされるものは、イスラームが興るよりもせいぜい150年ほど遡るにすぎず、この短い期間がジャーヒリーヤ文学時代ということになる。それよりも前は、先ジャーヒリーヤ時代といわれている。

イスラームが征服するまでは、アラビア北西部にはガッサーン *Ghassān* が、北東部にはラフム *Lakhm* という小王国があった。また、中央部のネジドにはキンダ王国 *Kinda* があった。ラフムは、イラクのアルヒーラ *al-Hīra* に都があった。これら小さい王国の5世紀末までの歴史の詳細を語るには資料が乏しく不十分だが、ガッサーンはビザンツの緩衝国家としてペルシャが支援するラフムと対抗していた。これら小国は、元々は南系のアラブであったが、北方へ移住したといわれている。

1.2. ガッサーン王国

彼らはアラビア北西部に移住し、ヨルダンの東部に王国を建てたが、首都は固定せず、アルジャウラーン *al-Jawlān*、アルジャービヤ *al-Jābiya*、ジャルーラーウ *Jalūlāʾ*、および、ダマスクス近くのジッラク *Jillaq* などに都を変えた。おそらく、彼らはベドウィンとしての性格を保持していたのであろう。アラブの歴史家たちは、ガッサーン朝の創始者はジャフナ *Jafna b. ʿAmr* であったとしている。同王朝の系譜をたどると、3名の王が特によく知られている。

ジャバラ *Jabala ʿAbī Ṣhamir* (528-569) はアルヒーラの軍勢を敗北させたので、ビザンツ皇帝からシリアの全アラブの絶対的統治権を付与され、諸部族の長 *faylārik* および将軍 *baṭrīq* という称号を与えられた。これはビザンツの皇帝に次ぐ官位であった。

アルハーリス王 *al-Hārith b. Jabala* のころ、ラフム朝のアルムンジル王 *al-Mundhir b. Māʾ al-Samāʾ* は10万の精鋭部隊を率いてガッサーン領に攻め込んだが計略にかかり、544年に殺害された。この計略の日は、「ハリーマ *Ḥalīma* の日は秘密ではない」という諺となっていて、次のように伝えられている。

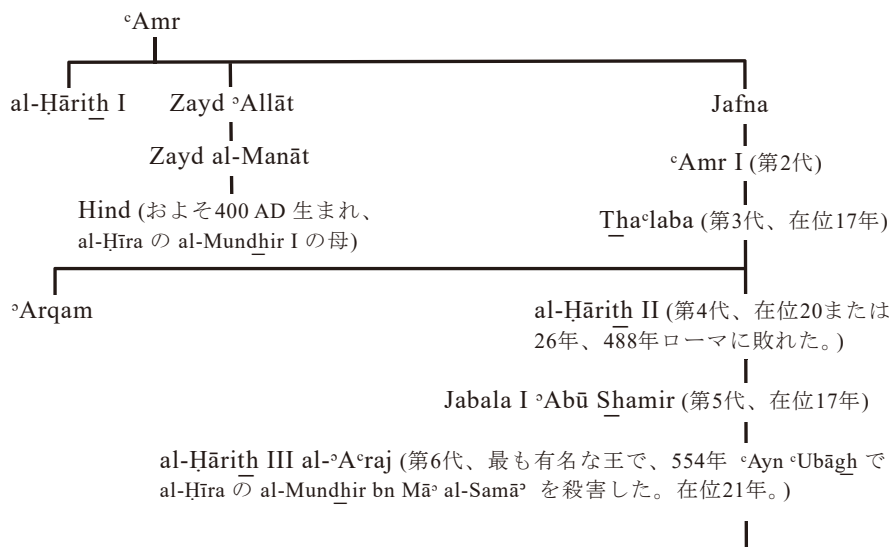
アルムンジル王はガッサーンのアルハーリス王を攻めるために 10 万の精鋭部隊を率いて進撃した。これに対してアルハーリス王は、表向きは和解すると称して 100 名の代表団を派遣した。その中にはムアッラカ詩人ラビードも加わっていた。アルハーリスの姫ハリーマは前記 100 名に香水を振りかけ、鎖かたびらを着せ、その上を亜麻布で包み、武装していないように見せかけた。その上で、アルムンジル王のテントを囲み一息に王と部下を殺した。これが上記の諺として伝えられている。

ガッサーン王家は、4 世紀ごろからキリスト教徒となっていた。アルハーリス王は、ペトラからタドムルまでを支配下に置いていた。彼はコンスタンティノープルを訪問し歓迎を受けた。

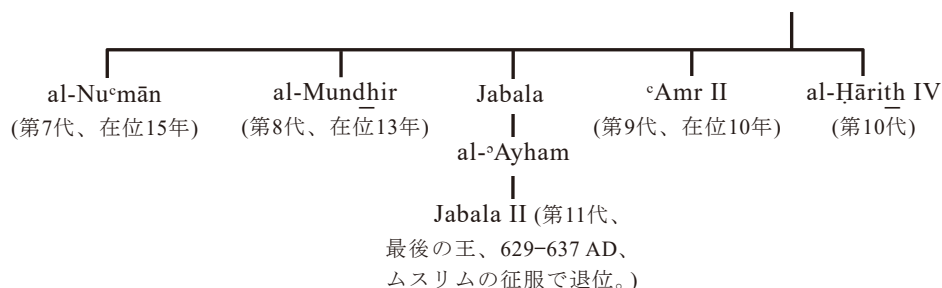
最後に、アルムンジル王 (569-581) を取り上げる。彼は 570 年、アイン・ウバーグ °Ayn °Ubāgh の戦いでラフム朝のカーブス王 Qābūs に決定的な勝利をおさめた。しかし、かれは単性論派に属していたため、ビザンツからの支援を打ち切れ、シシリア島に追放された。それ以後、ガッサーンは分裂し、やがてイスラーム征服軍に吸収された。

ガッサーン朝の系譜については不明な点が多く、17 世代 22 名の王をあげる説もあるが、ここでは Dr. Sprenger の研究に依拠した Lyall が掲げる系譜を紹介する (C.J. Lyall, *Ancient Arabian Poetry*. London, 1930, pp. 98-99)。

〔ガッサーン王家の系譜〕⁸⁾



8) 〔校正者注：本系譜と南北アラブ略譜 (2.1節) の作図は藤井章吾先生のご助力である。〕



1.3. ラフム王国

ラフム王国は、イスラーム前にイラクのアルヒーラ al-Hīra を中心に栄えたアラブの王朝である。アラブの血統学者らによると、この王朝は南アラブのカフターン系の部族で、後にイラクに移住したとされている。ペルシャのサーサーン朝（224-651）は、ラフム王国をビザンツ側のガッサーン王国やベドウィンの侵略を防ぐ緩衝国家として利用した。伝説によると、ジャジーマ・アルアブラシュ Jadhīma al-°Abrash というネストリウス派の王がこの地方で有力者であったが、その姉妹の子アムル °Amr b. °Adī al-Lakhmī が後を継いでラフム王国の創始者になったといわれている。

アルヒーラはシリア語でヘールター hērtā⁹⁾「駐屯地」に由来し、ユーフラテス河岸の肥沃な地であった。ペルシャ皇帝サーブール（241-272）は前記アムルを起用してラフム国の王とした。アムルの子はイムルウルカイスで、有名なアンナマーラ al-Namāra 碑文で「全アラブの王」と呼ばれている。以下、よく知られている王について若干触れる。

アンヌアマーン al-Nu°mān al-°A°war は、アルハワルナク al-Khawarnaq とアッサディール al-Šadīr という宮殿を建てた。ペルシャ皇帝ヤズデギルド I 世（399-420）は長男バフラーム・ゴール Bahram Gōr をアンヌアマーンに託し、騎馬や狩りなどを教えた。皇帝が没した後、王は後継者問題に介入してバフラームを皇帝につけたのでラフム王国の地位は一挙に高められた。

アルムンジル III 世 al-Mundhir b. Mā° al-Samā°（554 年没）のころ、ラフム王国は最盛期を迎えた。このころ、ペルシャ皇帝クバーズ Qubādh はマズダク教を帝国の宗教と定め、ラフム王国に改宗するよう求めたが、王はこれを拒否した。このため、皇帝はアルムンジル王を廃位し、キンダ王国のアルハーリス al-Hārith b. °Amr をラフム王国の王に起用した。しかし、皇帝が没しアヌーシルワーンが帝位に就くと、アルムンジル III 世を復位させた。このためキンダー族とラフム王国との間で何度も戦いが起こり、ついにはキンダは崩壊しラフム王国の支配下に置かれた。

9) 〔校正者注：hēr- < hē°r- < *hā°r- < *hadr- ‘camp’. -tā はシリア語で限定女性語尾であるから、hērtā = al-hīr-atu. アラビア語の حَضْرَة، حاضرة، حَضْرَة ‘settlement’ に対応。Cf. Arabic °arḍ ‘earth, ground’ = Syriac °ar°-.〕

アルムンジル王はガッサーンと何回も戦って優位に立ち、532 年にはついにビザンツとペルシャは休戦協定を結んだ。その結果、王は莫大な賠償金を得た。

アラブの伝説によると、王は幸運と災難の日を定め、幸運の日には、最初に出会った者に 100 頭のラクダを与えた。しかし、災難の日に出会った者には死を与えた。ウバイド・ブヌ・アルアブラスという詩人がこのことで殺された。そのため王は反省し、この悪習をやめたとのことである。アルムンジル王がガッサーン王と戦った「ハリーマの日」に暗殺された件はすでに触れた。

その後、アムル °Amr b. Hind (554-569) が王位についた。ヒンドはアムルの母の名で、キリスト教徒であった。しかし、アムルは父祖伝来の多神教徒で、独裁的な暴君であった。彼はタミーム族の男 100 名を火刑にし、アルムハッリク al-muḥarriq 「火刑者」と言われている。彼の専横ぶりは多くの詩人たちに風刺されているが、一方では、詩人たちを宮殿に招いて賞賛詩を詠ませ、多くの賞金を与えてアルヒーラを文学拠点とした。その一人アムル・ブヌ・クルスーム °Amr b. Kulthūm (6 世紀、ムアッラカ詩人) は、自らの母を侮辱したとしてこの王を殺したと言われている。

ラフム朝最後の王アンヌアマーン III 世 al-Nu°mān °Abū Qābūs (580-602) は、キリスト教に改宗した最初の王であった。彼はアムル王と同じように多くの詩人たちを宮殿に招いて賞賛詩を詠ませた。

アンヌアマーン王はペルシャ皇帝キスラー II 世の怒りに触れ、マダーインに連行されて殺された。その後、バクル族などが反乱を起こしたが、632 年、ハーリド・ブヌ・アルワリードがアルヒーラを攻略し、イスラームの支配下に入った。

この王国は、ガッサーンよりも広い領域が支配下にあった。バクルやタグリブなどのイラクの諸部族、ネジドのキンダ王国が亡んだ後の諸部族などである。また、アルヒーラには、アラブのほか、イバーデー °Ibādī と呼ばれるキリスト教徒も住んでいた。彼らの中には、アラブ人も非アラブ人もいた。また、ナバタイ系のアラブやアラム系の子孫、および、ペルシャ人やユダヤの入植者などもいたようである。

以下には、ネルデケの研究を Lyall が取りまとめたラフム王家の系譜を紹介する (C.J. Lyall, *Ancient Arabian Poetry*. London, 1930, pp. 101-102)。

〔ラフム王家の系譜〕

A. 伝説上の王

1)	°Amr I b. °Adī b. Naṣr b. Rabī°a b. Lakḥm	在位 118/100/60 年
2)	Imru° al-Qays I	45
3)	°Amr II	30
4)	°Aws b. Qallām I	5
5)	Imru° al-Qays II	25
6)	al-Nu°mān I al-°A°war ¹⁰⁾	29

10) ササン朝の Bahram Gōr を保護し、al-Khawarnaq 宮殿を建設。

B. 半歴史的王

- | | |
|-------------------------------------|----|
| 7) al-Mundhir I (母は Ghassān の Hind) | 44 |
| 8) al-ʿAswad (母は Bakr 系の Hirr) | 20 |
| 9) al-Mundhir II (8 と同母の兄弟) | 7 |

C. 歴史的王

- | | |
|---|------------------------------|
| 10) al-Nuʿmān II (8 の子、母はキンダの al-Hārith の姉妹) | 4 |
| 11) ʿAbū Yaʿfur (ラフム家だが王統でない) | 3 |
| 12) al-Mundhir III b. Imruʿ al-Qays b. Māʾ al-Samāʾ | 49 ¹¹⁾ |
| 13) ʿAmr III (母 Hind はキンダ王国 al-Hārith の妹) | 15-16 |
| 14) Qābūs | 4 (569-573) |
| 15) ペルシャのサトラップ | 1 年以内 |
| 16) al-Mundhir IV (母は Hind、13 の兄弟) | 4 |
| 17) al-Nuʿmān III ʿAbū Qābūs | 22 (580-602 ¹²⁾) |

1.4. キンダ王国

キンダはガッサーンとラフム王国の間のネジドに興った三番めの王国であった。碑文などから、およそ 4 世紀頃ハドラマウトの西に住んでいた南アラブ系の部族によって王国になったといわれている。アラブの血統学者によると、この王国の祖はサウル (キンダ)・ブヌ・ウファイル Thawr b. ʿUfayr b. ʿAdī で、元々はサバ Sabaʾ 王国に繋がる人物であったとされている。

5 世紀になると、フジュル Hujr b. ʿAmr b. Muʿāwiya という王が登場している。彼は別名をアーキル・アルムラール ʿĀkil al-Murār と言い、ヒムヤル Himyar の王ハッサーン・トッバア Ḥassān Tubbaʾ の継 (ま) 兄弟であった。ハッサーン王はアラビア中央部で多くの部族を征服し、フジュルに支配させた。その結果、キンダの領域はラハムの領域にまで影響を及ぼすようになった。

アルハーリス al-Hārith b. ʿAmr が王位に就く頃、キンダ王国は絶頂期を迎えた。彼は短期とは言え、ペルシャ皇帝クバーズ Qubādī の命令でラフム王国の王にされた。しかし、アヌーシルワーン皇帝 (531-579) になると、その地位を追われた。代わって、ラフム朝のアルムンジル・ブヌ・マーウ・アルサマーウが再び王位についた。キンダのアルハーリスおよびその息子たち 4 名は、すべて計略にかかり殺された。有名なムアッラカ詩人イムルウルカイスは、キンダ王国の末裔である。

2. 「北アラブ」と「南アラブ」

2.1. はじめに

アラブの血統学者らは、古来、アラブを二種類に分ける。アドナーン系 ʿAdnān 「北アラブ」とカフターン系 Qaḥṭān 「南アラブ」(旧約聖書の Yoqtān に相当)である。

11) 505か506に即位、554年ガッサーンの al-Hārith に暗殺される。

12) あるいは、585-607。

カフターン（南アラブ）は政治、経済的理由で、早い時期に北方に移住した。特にマアリブ Ma^crib のダムが崩壊したあと、ヒムヤル王国は弱体化し、多くのカフターン系の部族がアラビア半島各地に移住した。例えば、キンダはネジド北方に王国を立てたが、イスラーム期まで一族の者は依然としてハドラマウトに残存していた。キンダの王たちの名前の中には、シュラフビール Shurahbīl とかマアディーカリブ Ma^cdīkarib のように南アラブである証拠が見つかる。

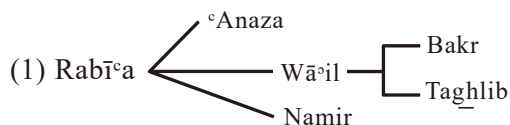
イヤード ʿIyād 族はナジュラーン Najrān の北にいたが、その一族はユーラテス周辺に移住している。アルアズド al-ʿAzd 族の一部はアルアマン¹³⁾およびオマーンの北方に移住し、その一部であるアルアウス al-ʿAws およびアルハズラジュ al-Hazraj はヤスリブ Yathrib、後の al-Madīna に移住した。ガッサーンはシリアに移り王国を立てた。タヌーフ Tanūkh はバハレーン al-Bahrayn を経由してイラク南部に定着したが、その一部ラフム家はアルヒーラに王国を築いた。これらは、南から北へと移住したカフターン系諸部族の例である。

アドナーン「北アラブ」の系譜は、マアッド Maʿadd 次いでニザール Nizār となり、ラビーア Rabīʿa とムダル Muḍar のところで枝分かれする。このため、マアッドが「北アラブ」と呼ばれることもある。ラビーアの子孫では、バクル族とタグリブ族が優力であった。バクル族はアルヤマーマ al-Yamāma およびアルバハレーンに広がり、多くの支族を持っていた。一方、タグリブ族は半島北部では彼ら以上の領域に住んでいた。

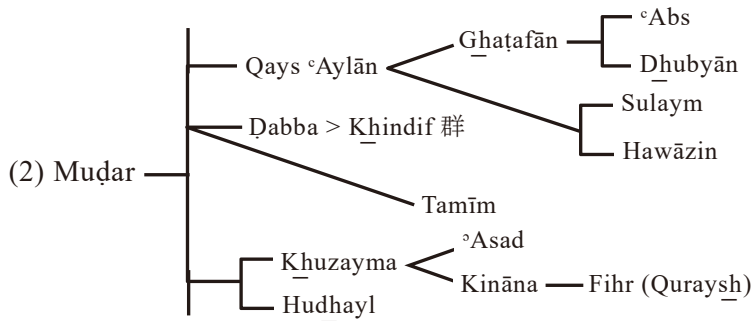
ムダルの子孫は、カイス・アイラーン Qays °Aylān とダッバ Ḍabba 他とを区別して、ダッバ以下をヒンディフ Khindif 群と呼んでいる。カイス・アイラーンでは、ガタファーン Ghaṭafān の子孫アブス °Abs とズブヤーン Dhubyān が有力な部族であった。なお、有名なクライシュ Quraysh 族はムダル系の子孫で、北アラブである。以下に、南アラブと北アラブの系譜を簡略に示す。出典はニコルソンの文学史である (R.A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs*. Cambridge, 1966. Introduction, pp. xviii-xix.)。

南アラブ：Qaḥṭān—Himyar、Ṭayy、Kinda、Kahlān、Tanūkh など
(イスラム前から中央、北アラビアに住んでいた)

北アラブ：^oAdnān—Ma^oadd—Nizār — Rabī'a (1)
 — Mudar (2)



13) 〔校正者注：詳細は不明。〕



2.2. 南・北アラブの対立抗争

アラブは、彼らの全体的な人種的意識を持っていなかった。南・北のアラブはジャーヒリーヤ時代からイスラームまで、それぞれの祖先の血縁を誇り、部族の連帯意識を強め、両部族間の流血の戦いに発展することがしばしば見られた。ラフム、ガッサーンおよびキンダなどの王国はいずれも、部族間の連帯による王国であって、アラブを統一する意識はほとんど見られなかった。

ある部族が他の部族と連盟を結ぶことによって自部族を守ることを、ヒルフ *hilf* (複数 *ahlāf*) と呼んでいる。その好例はイラクのタヌーフで、多くの部族がこれに加わった。また有名な香料連盟と言われる連盟もあった。これはアブド・マナーフ ʿAbd Manāf、ズフラ *Zuhra*、タイム *Taym* およびアサド ʿAsad がアブド・アッダール ʿAbd al-Dār の連盟と対抗した連盟であった。彼らは連盟に際し、どんぶりの香料に手を入れ、染めたと言われている。

ダッバをはじめとする 5 部族によるアッリバーブ *al-Ribāb* 連盟、クライシュ、キナーナおよびフザーア *Khuzāʿa* などによるフムス *Hums* 連盟などもよく知られている。

部族には多くの支族があるが、それらはバトン *batn* 「腹」とかファヒズ *fakhidh* 「脚」などと言われている。部族は傘下の支族のシャイフ *Shaykh* 「首長」からなるマジュリス *majlis* 「協議会」を有し、部族の問題を処理した。部族の成員は誰でもマジュリスに出席して意見を述べる事ができた。多くの場合は、知恵に長け経験豊かなサイイド *sayyid* 「部族長」が主宰し、戦いを指揮し、戦利品の分配を決め、盟約を結んだりした。しかし、部族長に絶対的権力が集中していたのではない。部族長が専横を極めると、殺されることもあった。

タグリブの部族長クライブ *Kulayb* がバクル族により殺されたのはその一例である。すなわち、部族長は尊敬はされていたが、格別な権利はなく、隣人保護や弱者救済などの義務が課されていた。

部族の成員が他の部族に殺されると、部族員には復讐の義務が課せられた。この場合、殺害側部族の同等の者を殺すか、逆に、血償を支払うかのいずれかで決着した。部族の成員は父祖の慣行 (スンナ) *sunna* を護るのに熱心であり、その範囲での自由は認められていた。彼らは部族の拠点や井戸や牧草地を守り、婦女子や弱者

を保護しながら、他方においては、戦備を整え勇敢な略奪戦を行っていた。彼らが理想とするこのような資質を人々はムルーア *murū'a*「男らしさ」と呼んでいる。ジャーヒリーヤ時代の詩人たちは、彼らの英雄的行為を賛美し、敵部族をどれほど多く殺したかを数え上げている。また、彼らはアルヤマンやインド製の刀、槍、武器、軍馬などを自慢している。

2.3. アラブが戦った日々 *ʿAyyām al-ʿArab*

ジャーヒリーヤ時代のアラブは戦った日をアラブの日（ヤウム *yawm*「日」）と呼んでいた。戦闘がナハール *nahār*「昼間」に行なわれ、夜は中止したのでこの名称がつけられたと言われている。

彼らにとって、復讐戦は従うべき慣行であり、この義務から逃れる権利はなかった。このため、誰かが仲裁して和解するまで、戦いが続くことが多かった。タアッバタ・シャッラン *Taʿabbata Ṣharraṇ* は次のように詠んでいる。

「少ししか眠らず、最大の関心事は復讐の血を流すこと。または、顔面を焦がす勇者と対決して殺すこと」(ʿAbū Tammām 編 *Ḥamāsa*, 2-492)。

アラブが戦った日については、イブン・アンナデーム (Ibn al-Nadīm, 986-995?) のアルフィフリスト *al-Fihrist* をはじめ多くの資料がある。現代では Muḥammad ʿAḥmad Jād et al., *ʿAyyām al-ʿArab fī al-Jāhiliyya*, al-Qāhira, 1961 が便利な資料になる。

これによると、アラブが戦った日は、次のように分類されている。

- ①アラブとペルシャの戦い 2 回
- ②カフターン部族間の戦い 7 回
- ③カフターンとアドナーンの戦い 9 回
- ④ラビーア部族間の戦い 1 回
- ⑤ラビーアとタミームの戦い 15 回
- ⑥カイス部族間の戦い 11 回
- ⑦カイスとキナーナの戦い 4 回
- ⑧カイスとタミームの戦い 7 回
- ⑨ダッバとその他の戦い 4 回
- ⑩その他の戦い 3 回

一例として、ラビーア部族間でのバスース *al-Basūs* の戦いを簡単に述べる。この戦いは 5 世紀末、ワーイル *Wā'il* の子である兄弟部族バクルとタグリブの間でおおよそ 40 年続いたと言われている。その間、両者は 6 回の戦いを重ねている。1 回目は *Nihy*「ニフイの日」でシャイバーンの水場で戦い、タグリブが勝った。2 回目は *Dhanā'ib*「ザナーイブ」というメッカからバスラに向う道中で戦い、タグリブが勝った。3 回目はワーリダート *Wāridāt* という土地で戦い、タグリブが勝った。4 回目はアルヤマーマのウナイザ *ʿUnayza* で戦い、引き分けた。5 回目はクサイバート *Qusaybāt* という土地で戦い、タグリブが勝った。しかし、最後の 6 回目は、タフラーク・アッリマム *Taḥlāq al-Limam*「頭髮の一部を剃ること」の戦いでバクルが勝つ

た。この戦いの日、バクルは頭髪を剃っていたのでこの名がついたと言われている。両者の戦いは長く続き、双方とも消耗した挙句に、ラフム王国のアルムンジル 3 世の仲裁で和解した。

3. ジャーヒリーヤ時代の文学

3.1. はじめに

ジャーヒリーヤ時代の文学は、詩をはじめ諺、演説、物語など、韻文、散文いずれもあるが、すべて口伝に頼っていたため、多くが失われるか変容した。この時代の文学の中心は、詩である。

今日までに伝えられている最古の詩は 490 年頃、バクルとタグリブ部族との間で起こった 40 年に及ぶバスースの戦いに関するアルムハルhil al-Muhalhil (531 頃没) の長詩と言われている。詩人の本名はアディー・ブヌ・ラビーア・アッタグリビー ʿAdīy b. Rabīʿa al-Taghribī で、ムアッラカート詩人イムルウルカイス Imruʿ al-Qays (6 世紀) の叔父に当たるとする説もある。

この時代には共通語としてのアラビア語が成立し、完成度の高い詩が詠まれるようになっていた。すなわち、アラブ詩は韻律および脚韻においても、話題の展開や修辞などにおいても、カスィーダ qaṣīda という形式の長詩として完成していた。しかし、アラブ詩がそれまでどのような発展の経過を経たのかは、歴史の中に埋没して明確なことは分かっていない。

例えば、同時代の代表的詩人、イムルウルカイスは、「変わり果てた廃屋の跡に立止まり イブン・ヒザームが泣いたようにかつての住まいを想い涙を流した」と伝えているが、イブン・ヒザームという詩人がいつ頃の人物か、全く分からない。しかし、多くの詩人たちはナスィーブ nasīb「愛を語る序詞」の部分でかつて恋人と住んでいた廃屋跡を訪ねて思い出に泣く、という場면을詠うようになった。前記イムルウルカイスの「ムアッラカ」冒頭 1-6 行は典型的なナスィーブである。その 1-2 行は以下のようになっている。

1. 生まれ、恋人とその住まいを思い出して、さあ泣こう。アッダフルとハウマリと
2. トゥディフとアルミクラートの間の、砂が寄り合うふちべに、彼女の住まいはまだ跡形を留めているが、それは南風と北風が織りなしたものである。

このように、廃屋を訪ねて思い出に泣く al-bukāʿ alā al-aṭlāl というのが、多くのナスィーブで詠まれるようになった。これはすべて、過去の思い出に限られ、現在や未来の恋人を語るものではなかった。

次いで、ラクダや時には馬に乗った砂漠の旅について語る。詩人が乗るのは大抵メスラクダ nāqa であって、その速さは野生の動物や鳥類に比せられる。旅についてのラクダの描写は、タラファによる「ムアッラカ」のそれが他の追従を許さないと見なされている。なお、アムル・ブヌ・クルスームの「ムアッラカ」のように、旅の部分が欠けたカスィーダもある。

詩人は廃屋を訪ねて涙を流し、砂漠での旅に言及したあと、詩の本題を取りあげる。それは、ある人物や部族への賞賛 *madīḥ*、風刺 *hijā'*、誇り *fakhr*、哀悼 *rithā'a* のいずれかであった。相手の気を引くための小言 *'itāb* とか言い訳 *'i'tidhār* など主題としたものは少ない。

カスィーダは上句と下句で行 *bayt* 「行」を作り、それを重ねて構成する。長いものでは 100 行を越えるものもある。各行は、韻律 *baḥr* または *wazn* (一定の長短の音節の組合わせ) と脚韻 (押韻とも) *qāfiya* で統一されており、音楽性が豊かである。時に、韻律が乱れたものや、脚韻が守れていないものがあるが、大部分のカスィーダにおいては作詩規律は厳格に守られている。

ジャーヒリーヤ時代の詩人たちは、16 種類ある韻律のうち、タウィール *Ṭawīl*、バシート *Basīṭ*、カーミル *Kāmil*、ワフイル *Wāfir*、サリーウ *Sarī'*、マディード *Madīd*、ムンサリフ *Munsariḥ*、ハフイーフ *Khafīf*、ムタカーリブ *Mutaqārib*、ラザジュ *Razaj* などを好んで作詩していた。

多くの学者は、コーランに見られる押韻散文 *saj'* から生まれたラジャズ *Rajaz* が最古の韻律であると説いている。それはラクダが砂漠を歩む時の蹄の音に合わせて歌うヒダーウ *ḥidā'* と呼ばれる歌の韻律であって、他の韻律はこれから生まれたという。しかし、ジャーヒリーヤ時代の優れた詩人たちはラジャズ調での作詩をせず、タウィール、バシート、カーミル、ハフイーフ調をとりわけ好んだようである。

「アルムアッラカート」詩集でも、タウィールとカーミル調が各 3 編、ハフイーフ調 1 編の韻律である。

なお、ジャーヒリーヤ詩はすべて、スラーム期に作られたものであるとの説が以前はあった。しかし、その後の論争を経て、一部に後世の要素が紛れ込んでいるとしても、全体的に見て、ジャーヒリーヤ詩はアラブ精神を反映する偉大な民族的文化遺産であるとの再評価に至っている (D.S. Margoliouth, “The Origin of Arabic Poetry”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1925; Ṭāhā Ḥusayn, *Fī al-Shi'r al-Jāhilīy*, Cairo, 1927)。

3.2. 詩と歌

詩は古くから詠まれるだけではなく、ジャーヒリーヤ時代には歌として歌われていたと考えられる。「歌の書」*Kitāb al-ʿAghānī* によると、詩人たちは詩を歌うときにはミズハル *mizhar* 「リュートのような弦楽器」、ドゥッフ *duff* 「タンバリン」、サンジュ *ṣanj*¹⁴⁾ 「竪琴」、バルバト *barbat* 「ギター」などの楽器を用いていた。有名な詩人アルアアシャー *al-ʿAʿshā* (629 没) はサンジュを鳴らして歌ったので「アラブの竪琴歌手」呼ばれている。また、彼は自らの詩の中でフライラ *Hurayra* というカイナ *qayna* 「奴隷歌姫」がアラブ詩を歌っていたことに言及している。タラファの「ムアッラカ」48-50 行にも歌姫が描写されている。

14) [校正者注：通常は「シンバル」だが「ハーブに似た弦楽器」とも。Lane の辞書、p. 1731c を参照すると、詩人アルアアシャーへの言及もある。]

また、イムルウルカイスの「ムアッラカ」54行は馬を描写しているが、タウィール調の韻律で配置される音の連続は、同時に歌われたことを推測させる。

(line 54) mikarrin mifarrin muqbilin mudbirin maʿan

ka-julmūdi ṣakhrin ḥaṭṭa-hu s-saylu min ʿali

「襲うと見せて忽ち引き、進むかと思えば同時に引く。

そのさまは激流のため、高地から落下する大岩のようである。」しかし、ジャーヒリーヤ時代の末になると、多くの詩人たちは詩を歌うよりも、インシャード ʿinshād「唱える」に変わったようである。

3.3. 詩の編集

アラブはジャーヒリーヤ時代には詩を編集しなかった。一部の詩人が詩を記録していたように伝える資料もあるが、石や木や皮などに簡単な伝言を書いた程度のものであって、詩集を編集するようなものではなかった。

ハンマード・アッラーウィヤ Ḥammād al-Rāwīya (772 頃没) に関し、次のような逸話がある。アンヌアマーン・ブヌ・アルムンジル al-Nuʿmān al-Mundhir (ラフム王国の王、602 没) はアラブ古詩の冊子を筆写させて宮殿に埋めさせた。アルムフラールなる者が宮殿の下に宝物があると言われ掘り出すと、詩集であった。それゆえ、クーファの住民は、バスラの人よりも詩をよく知っているとある。この話は、ハンマードがクーファの人で、バスラとの論争でクーファ優位を語った逸話であるから信頼できないとされている。アラブがジャーヒリーヤ詩を編集し、詩集をまとめたのはイスラーム時代で、相当の時間経過後のことと思われる。それまでは詩はすべて口伝に頼っていた。ハディース al-ḥadīth「預言者の伝承」ですら、約1世紀間はおそらく口伝であった。以上から、コーランやハディースが編集された後に、詩が編集されたのは自然の成り行きであった。

詩を口伝することはリワーヤ riwāya と言われるが、それはジャーヒリーヤ詩を広めるための手段であった。そこには詩を語り伝える階層が形成された。詩作を試みる者は既存の詩人に仕えて、その詩を語り伝えた。口伝を続けるうちに、ラーウィー rāwī「口伝家」が、やがて詩人に成長したのである。有名な例としては、タミーム族のアウス・ブヌ・ハジャル ʿAws b. Hajar (580-620) があげられる。ズハイル Zuhayr (609 没) は、ムザイナ Muzayna 族の出身で元々アウスのラーウィーであった。ズハイルは成長して「ムアッラカ」詩人の一人に数えられるまでになったが、彼の息子カアブ Kaʿb (645 没) やアルフタイア al-Huṭayʿa (678 没) らは、ズハイルのラーウィーになった。

アルフタイアが詩人になると、ウズラ族のフドバ Hudba がラーウィーになり、次いで、ジャミール Jamīl (701 没) とクサイル Kuthayr (723 没) がそれぞれラーウィーになり、やがて詩人になった。

正統カリフ第2代ウマル (在位 634-644) がディーワーン「年金台帳」を作成するにあたり、アラブの血統に関する情報が強く求められるようになって、古詩の重要

性が高まった。アラブは古来、血統の知識に優れた者たちがいて、ムスリム遠征軍の兵士らの年金を決めるのに大きな役割りを果たしていた。

また、正統カリフ第4代アリー（在位 656-661）とウマイヤ朝カリフ初代ムアウィヤ（在位 661-680）の間に起こった戦いでは、ウマイヤ朝でアルアサビーヤ *al-ʿaṣabīya* 「部族連帯主義」が強かった。各部族は自部族の功績を取り上げ、敵対部族の弱点を詠んだ詩を語るのに熱中した。古詩が、対立する部族を傷つける武器とされたのである。

ウマイヤ朝はアラブ指向の王朝であったが、初代カリフとカリフ第5代アブド・アルマリク *ʿAbd al-Malik*（在位 685-705）などは、特にこの傾向が強く、アラブの文化遺産保存に努めた。部族の代表団がカリフを訪問すると、多くの場合、各部族の詩人について質問を下し、返答次第では、莫大な報酬を与えた。

一方、イスラーム初期から、カッサース *Qaṣṣāṣ* という者たちが現れ、モスクで説教をし、その中でジャーヒーリーヤ時代の故事や古詩を引用した。

ウマイヤ朝期では、アルクマイト *al-Kumayt* (679-744)、アッティリンマーフ *al-Ṭirimmāḥ* (670-728)、ズー・アッルンマ *Dhū al-Rumma* (735 没)、アルファラズダク *al-Farazdaq* (640-728)、ジャリール *Jarīr* (658-720)、ルウバ *Ruʿba* (762 没) などの詩人が古詩を多く記憶し、若者たちに伝えたと言われている。

アッバース朝初期、すなわち、8世紀後半になると、詩人にならない職業的なラーウィーが出現する。彼らはバスラやクーファなどの軍団都市に住み、大モスクで円座を設け、非常用語を解説したり故事や古詩などに関して講義するラーウィーになった。このため、彼らはネジドに住む遊牧民を訪ね多種の情報を集めていた。彼らは、ベドウィンが純粋なアラビア語を話す人々と見なしていたからである。専門的ラーウィーたちは、ベドウィンがバスラやクーファに来れば、同じく、多くの資料を集めた。これらの専門的ラーウィーたちの目的とするところは、コーランの文言解釈と、そのための文法と辞書学の確立であった。このために、彼らは例証として古詩を大々的に取り上げ、多くの語彙の蒐集に努めた。

アッバース朝になると、ウマイヤ朝で強かったアラブ的傾向の反作用として、シュウビーヤ *shuʿūbīya* と呼ばれる運動が強くなった。預言者ムハンマドはイスラームのもとでは信徒はすべて兄弟であると説いている。コーラン 49章 10節には「信者たちは兄弟である。それゆえ、汝らは二人の兄弟の間を鎮めよ」とある。また、コーラン 47章 13節には「人々よ、われらは汝らを一人の男と女からつくり、種族 *shuʿūb* と部族としたが、これひとえに汝らが互いに知己となるためである。神のもとにおいて、汝らのなかで最も尊い者は、神を最も畏れるものである」とある。

しかし、ムハンマド以後、アラブは周辺への征服者となり、非アラブの目には尊大な者と映った。これに対して、ペルシャを中心とする非アラブは、「預言者とコーランは別だが、それ以外においては、アラブは粗野で非文明的である。これに対し、非アラブは優れた文化遺産を受け継いでいる」と主張した。

3.4. 庇護民の活躍

今一つ重要なことであるが、アラブは奴隷を解放すると奴隷のときの主人であった者のマウラー *mawlā* (複数 *mawālī*) 「庇護人」として部族員に加えていた。この伝統的な習慣が、イスラームに改宗した非アラブをイスラーム共同体に受け入れる場合に応用された。

少なくともイスラーム後 1 世紀間、ウマイヤ朝末期 (740 年) 頃まで、部族的習慣が続いていた。このため、多くのマウラー身分の者が登場し、イスラーム帝国の各分野で活躍することになった。

彼らの中にはアラビア語を学び、アラブよりも優れた業績をあげた者もいた。アラブとの優劣論争に勝つためにジャーヒリーヤ詩を編集したり、注釈をしたりした者の多くは非アラブのムスリムであった。彼らのおかげでジャーヒリーヤ詩が今日に伝えられたとしても過言ではないだろう。

アブー・ウバイダ ʾAbū ʿUbayda (728-824) はマアラーリーの一人で、強いシュウビーヤ感情を抱いていたが、彼はラーウィーたちの信頼が厚く、アラブの血統や戦いについて深い関心を向けていた。彼による「ナカーイド」*Naqā'id* (ジャリールとアルファラズダクによる論争集) の解説は有名である。この時代の専門的ラーウィーは、いわば、人文学者ともいえるべき人々であった。アブー・ウバイダ以外の主な人物には、アブー・アムル・ブヌ・アルアラー ʾAbū ʿAmr b. al-ʿAlā (771 または 774 没)、ハンマード・アッラーウィヤ *Ḥammād al-Rāwīya* (693-772)、ハラフ・アルアフラム *Khalaf al-ʿAḥram* (796 没)、アルムファッダル・アッダッビー *al-Mufaḍḍal al-Ḍabbī* (780 没)、アルアスマイー *al-ʿAṣmaʿī* (770-828) らをあげることができる。

アッバース朝の初期からラーウィーたちは、バスラとクーファの二学派に集約されるようになった。クーファ学派は口伝に厳格さを保たず、古詩に多くの贋作が混入したと言われている。クーファはダール・アッダルブ *Dār al-Ḍarb* 「鑄造の館」と呼ばれていたが、貨幣と同じく、贋作のハディースや詩も作られたことを示唆していた。とはいえ、バスラにも批判があり、両学派とも長所と短所が認められる。

ただ、バスラのほうが優勢とされているのは、双方のラーウィーの指導者の人柄が大きく影響しているためであろう。アブー・アムルは、バスラ文法学派の創始者の一人であり、コーランの読誦者の一人でもあり、非常用語、故事、古詩および戦いの日々などについて、深い知識のある人物とされていた。これに対し、ハンマードはクーファ学派のラーウィーの指導者であり、非アラブ出身の庇護民であった。彼は泥棒に入り金品を盗んだが、その中に古詩が書かれていたのを見て関心し、ラーウィーの道を志した。彼はラーウィヤ *rāwīya* 「大口伝家」と呼ばれるほどジャーヒリーヤ時代の詩や戦いの情報に通じていたが、ジンディーク *zindīq* 「二元論者」の思想にかぶれ、贋作に優れ、古詩にこれを混入したと言われている。だが、彼は有名な「アルムアッラカート」詩集をまとめた人物とも言われている。

同じクーファのラーウィーでも、アルムファッダル・アッダッビーは古詩、故事、戦争および血統などについて正確な知識を持ち、厚く信頼されていた。彼はクーフ

アのみならずバスラのラーウィーたちからも高く評価されていた。彼がまとめた「アルムファッダリーヤート」の大詩集は、特に有名である。

一方、バスラ学派のラーウィーでも、ハラフ・アルアフラムは非アラブ出の庇護民であったがジャーヒリーヤ詩に通じすぎていて、思いのままに贋作を混入したと非難されている。しかし、バスラ学派のアルアスマイーは両学派のラーウィーの信頼を得て「アルアスマイーヤート」という詩集を今日に伝えている。

なお、ジャーヒリーヤ詩においては、宗教的要素はあまり多くは表現されていない。ズハイルやラビードのカスィーダにはイスラームを予兆するような詩句が窺えるが、偶像神崇拝を語るものは大きく欠落している。しかし、このことは偶像崇拝がなかったことを示すものではない。おそらく、イスラーム時代になって古い詩を集めて偏集する過程で、多神教的要素を消しイスラームの唯一神と矛盾がないように改めたのであろう。カアバ神殿がイスラーム以前から存在していたことは明らかで、イスラームは、ジャーヒリーヤ時代の偶像崇拝の儀礼のいくつかを取り込んだ。

なお、キリスト教やユダヤ教がジャーヒリーヤ時代にアラビア半島内に徐々に浸透していたことに議論の余地はないが、本稿では論じない。

4. 主な古詩集とムアッラカート

4.1. 8世紀後半の主な古詩集

上記のような時代環境の中で次々に編纂されたアラブの古詩集のうち、私が日本語に訳した詩集は冒頭の2編である。

- 1) アルムアッラカート al-Mu^ʿallaqāt、ハンマード・アッラーウィヤ Ḥammād al-Rāwīya 編、772 没。
- 2) アルムファッダリーヤート al-Mufaḍḍaliyyāt、アルムファッダル・アッダッビー al-Mufaḍḍal al-Ḍabbī 編、780 没。
- 3) アルアスマイーヤート al-ʾAṣmaʾīyāt、アルアスマイー al-ʾAṣmaʾī 編、828 没。
- 4) ハマーサ詩集 Dīwān al-Ḥamāsa、アブー・タンマーム ʾAbū Tammām 編、845 没。
- 5) キターブ・アルアガーニー Kitāb al-ʾAghānī「歌の書」、アブー・アルファラジュ・アルイスバハーニー ʾAbū al-Faraj al-ʾIṣbahānī 編、972 没。
- 6) キターブ・アルシュル・ワ・アルシュアラーウ Kitāb al-Shiʿr wa-al-Shuʿarāʾ「詩と詩人たちの書」、イブン・クタイバ Ibn Qutayba 編、889 没。
- 7) ムフターラート・イブン・アルシャジャリー Mukhtārāt ibn al-Shajārī「イブン・アルシャジャリー詩選集」、イブン・アルシャジャリー Ibn al-Shajārī 編、1148 没。
- 8) ジャムハラ・アシュアール・アルアラブ Jamhara ʾAshʿār al-ʿArab「アラブ詩全集」、アブー・ザイド・アルクラシー ʾAbū Zayd al-Quraṣhī 編、10 世紀。
- 9) アルイクド・アルサミーン al-ʿIqd al-Thamīn fī Dawāwīn al-Shuʿarāʾ al-Jāhiliyyīn「ジャーヒリーヤ詩人の傑作集」、(アルアフラム) アッシャントマリー (al-ʾAʿlam) al-Shantamarī 編、1083 没。

4.2. ムアッラカートの概要

既に紹介した経緯で編纂されたアラブ古詩集の嚆矢は、ムアッラカートである。収録された詩7篇の特徴を以下に短くまとめておきたい。

1) イムルウルカイス

タウィール調（音節の長さで短長短－短長短長の構成を上句でも下句でも2回反復するのが正調）、脚韻 -lī, 82 行。ナスィーブ（愛の序詞）で始まり、恋の冒険に進む。この部分は誇り **fakhr** にあたる。後半は馬での狩りと嵐の描写で、長詩の構成法としては一般的ではない。

2) タラファ

タウィール調、脚韻 -dī, 103 行。ナスィーブ、ラクダの描写、誇りの三部構成。特に、ラクダの描写と現世での快樂主義の主張が際立っている。

3) ズハイル

タウィール調、脚韻 -mī, 59 行。ナスィーブと賛辞 **madīḥ** の二部構成。格言的な詩句が多い。6 世紀末のダーヒスの戦いでアブスとズブヤーン両部族を和解させた二人の調停者への賛辞が中心。

4) アンタラ

カーミル調（長長短長を上下各句ともに3回反復）、脚韻 -mī, 79 行。ナスィーブとラクダと誇りの三部構成。ラクダ部分でダチョウの描写が加味されている。この詩はダーヒスの戦いの最中に詠まれたもので、戦闘での勇者ぶりを誇っている。

5) アムル

カーミル調、脚韻 -īnā, 94 行。ナスィーブと誇りの二部構成。タグリブ族の栄光を詠み上げ、敵対するバクル族とラフム王を脅迫している。

6) アルハーリス

ハフイーブ調（上下の句でそれぞれ長短長長－長長短長でまとめる）、脚韻 -āū, 84 行。短いナスィーブとラクダと誇りの三部構成。アムルに対抗してタグリブ族を非難しバクル族を褒めている。古来、優れた詩ではないが、タグリブ族のアムルとのバランスを取るために詩集に加えたと言われている。

7) ラビード

カーミル調、脚韻 -āmuḥā, 88 行。ナスィーブとラクダと誇りの三部がバランスよく構成されている。野生のロバおよびオオカミの餌食となる野牛の描写が優れており、詩人および自部族を自慢している。

5. 主な参考資料

°Abduḥ °Azzām, M. (ed.), *Dīwān °Abī Tammām bi-Ṣharḥ al-Khaṭīb al-Tibrīzī*. 4 vols., Dār al-Ma°ārif, Cairo, 1951.

°Abd al-Ḥamīd (ed.), *Majma° al-°Amṭhāl li-l-Maydānī*. 2 vols., Cairo.

°Abd al-Salām M. Hārūn (ed.), *Kitāb Ḥayawān li-l-Jāḥīz*. 8 vols., 2 ed., Cairo, 1965-9.

- (ed.), *Sharḥ al-Qaṣā'id al-Sab' al-Ṭiwāl al-Jāhilīyāt* li-bn al-ʿAnbārī. Dār al-Maʿārif, Cairo, 1962.
- ʿAbd al-Salām al-Hāwfi (ed.), *Sharḥ al-Qaṣā'id al-ʿAshr* lil-Khaṭīb al-Tibrīzī. Beirut, 2 ed., 1987.
- ʿAḥmad ʿAmīn, *Fajr al-ʿIslām*. Maktaba al-Nahḍa al-Miṣrīya, Cairo, 1965.
- ʿAḥmad ʿAmīn wa-ʿAbd al-Salām M. Hārūn (eds.), *Sharḥ Dīwān al-Ḥamasa* li-ʿAbī Tammām. Maṭbaʿa Lajna al-Taʿlīf wa-l-Tarjama wa-l-Naṣḥr, Cairo, 1967.
- ʿAḥmad Zakī al-ʿAdawī (ed.), *Dīwān Zuhayr*. Cairo, 1964.
- Arberry, A.J., *The Koran Interpreted*. Oxford University Press, 1960.
- , *The Seven Odes*. George Allen and Unwin, London, 1957.
- 伴 康哉, 「イムルウルカイスとその作品」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『イスラーム文化に関する共同報告』No. 3, 1969.
- , 「悲劇の宮廷詩人タラファ」、『オリエント』14 巻、No. 2、1972.
- Blachère R., *Histoire de la littérature arabe*. 3 vols., Paris, 1952-66.
- Dodge, B. (ed.), *The Fihrist of al-Nadīm*. 2 vols., Columbia University Press, New York, 1970.
- Encyclopedia of Islam. New ed., Brill, Leiden, 2009.
- Farrāj, A. (ed.), *Sharḥ ʿAshʿār al-Hudḥalīyīn* li-l-Sukkarī. 3 vols., Cairo, 1965.
- Gibb, H.A.R., *Arabic Literature. An Introduction*. London, 1926.
- de Goeje (ed.), *Liber Poësis et Poëtarum*. Brill, Leiden, 1904 (*Kitāb al-Shiʿr wa-l-Shuʿarāʿ* li-bn Qutayba).
- Guidi, L. (ed.), *Kitāb al-ʿAghānī al-Kabīr* li-ʿAbī Faraj al-ʿIṣbahānī. Brill, Leiden, 1900.
- Ḥamd Allāh (ed.), *Sharḥ al-Muʿallaqāt al-Sabʿ* li-l-Zawzānī. al-Maktaba al-ʿUmayyīya, Damascus.
- Hanna al-Fakhūrī, *Tārīkh al-ʿAdab al-ʿArabī*. Beirut.
- Hitti, Philip K., *History of the Arabs*. 3rd ed., London, 1946.
- Ḥusayn, Ṭāhā, *Fī al-Shiʿr al-Jāhilīy*, Cairo, 1927.
- Ibn Manẓūr, *Lisān al-Arab*. 15 vols., 1955-6, Dār Ṣādir, Beirut.
- Jād, M. A., Bujawī, A.M., Ibrāhīm, M.A., *Ayyām al-ʿArab fī al-Jāhilīya*. 3rd ed., Cairo, 1961.
- Lane, E.W., *Arabic-English Lexicon*. 8 vols., New York, 1958.
- Lyall, C.J., *al-Muʿallaqāt. A Commentary on the Ancient Arabic Poem*. Calcutta, 1894.
- (ed.), *The Mufaḍḍalīyāt*. Vol. 1 (text), vol.2 (translation and Notes), Oxford, 1918-9.
- (ed.), *Sharḥ al-Qaṣā'id al-ʿAshr* lil-Khaṭīb al-Tibrīzī. Calcutta, 1894.
- Margoliouth, D.S., The Origin of Arabic Poetry. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 417-49, 1923.
- Max Seligson (ed.), *Dīwān de Ṭarafa*. Paris, 1901.

- Meisami, J.S., Starker, P. (ed.), *Encyclopedia of Arabic Literature*. 2 vols., Routledge, London, New York, 1998.
- Nicholson, R. *A Literary History of the Arabs*. Cambridge, 1966.
- al-Qurʾān (日本語) 井筒 俊彦『コーラン』上、中、下、岩波書店、1957-8、改訳 1964.
- , 藤本勝次、伴康哉、池田修共訳『コーラン』中央公論社、1970.
- , 日本ムスリム協会『聖クルアーン』日亜対訳注解、改訂版、1982.
- Shakir, M.M. (ed.), *Ṭabaqāt Fuhūl al-Shuʿarāʾ*. 2 vols., al-Jumhūrī Muḥammad ibn Sallām, Maṭbaʿa al-Madanī, Cairo, 1974.
- Shakir, A.M., Hārūn, A.M. (ed.), *al-Mufaḍḍalīyāt*. Dār al-Maʿārif, Cairo, 1962.
- (ed.), *al-ʿAṣmaʿīyāt*. Dār al-Maʿārif, Cairo, 1960.
- Shawqī Dayf, *Tārīkh al-ʿAdab al-ʿArabī*. al-ʿAṣr al-Jāhilī. Dār al-Maʿārif, Cairo, 1972.
- Watt, W. Montgomery, *Muhammad at Mecca*. Oxford, 1953.
- *Muhammad at Medina*. Oxford, 1956.
- Wüstenfeld, F. (ed.), *Muʿjam al-Buldān li-Yāqūt*. Leipzig, 1866-73.
- Yūsuf Khulayf, *al-Shuʿarāʾ al-Ṣaʿālīk fī al-ʿAṣr al-Jāhilī*. Dār al-Maʿārif, Cairo, 1966.

第3部：ムファッダリーヤート詩集

(ムファッダリーヤート) テキストと訳¹⁵⁾

あとがき

アラブの古詩集のなかで最も有名なのは「アルムアッラカート」と「アルムファッダリーヤート」である¹⁶⁾。「アルムアッラカート」は『関西アラブ・イスラム研究』第3号(2003年)から第7号(2009年)に試訳を発表した(第5号より『アラブ・イスラム研究』と改称)。ついで、同誌第7号(2009年)から「アルムファッダリーヤート」の試訳を掲載し始めた。本原稿の執筆時点では、第13号(2015年)でNo. 45アルムラツキシシュ・アルアクバルまで掲載している。「アルムアッラカート」と同様に、関西アラブ研究会の会員諸氏のご意見を参考にさせていただいてきた。

「アルムアッラカート」は、イムルウルカイスなど7名の代表的な詩人のカスィーダ(長詩)各一編(計7編)がハンマード(772没)によって編集されたと言われている。これに対して、「アルムファッダリーヤート」は、67名の詩人による130(うち補遺4)編の、長さも様々な詩が編集されている。そのうち16行以下の短い詩は62編を占めている。なお、補遺 No. 4(7行)は元来、No. 81アルムマッザク・アルアブディーの詩(9行)と同じものとされているので、計16行の詩として訳した。その

15) [校正者注：第2部が第3部ムファッダリーヤート詩集のまえがきを兼ねている。]

16) ジャーヒリーヤ時代の文学についての概説は、第2部で詳しく論じた。

補遺 No. 4 (7行) はウィーン写本 (アルマルズキー) による。

本詩集に含まれている67名の詩人のなかで、47名がジャーヒリーヤ時代の詩人(うちユダヤ教徒1、キリスト教徒2)、残り20名がジャーヒリーヤ時代からイスラーム時代に活躍したムハドリム (*mukhāḍrim*) 詩人である。また、本詩集の大部分は20行以下の詩である。わずかに2行よりなる詩もある。No. 58アルムラッキシュ・アルアスガルのそれは、単に敵に復讐をして傷が癒されたというだけを詠んでいる。当初から断片詩として作られたのか、元は長い詩が短くなったのか、今となっては詳細は分らない。No. 2アルカルハバは7行の詩であるが、1-5行で愛馬を褒めたあと6-7行とのつながりがなく、長い詩が大幅に脱落して短くなったものと思われる。No. 53アルムラッキシュ・アルアクバルの3行詩は、過ぎ去った青春がもう一度よみがえれば良いかと嘆いている。つまり、カスィーダ冒頭の愛の序詞のみで終わっていて、おそらく、それ以下はいつの間にか脱落したのであろう。

本詩集では、No. 40スワイド・ブヌ・アビー・カーヒルのカスィーダが最も長いとされている。しかしよく見ると、この詩は韻律と脚韻がおなじ2種の詩がいつのまにか一体化したとわかる。すなわち、1-44行と45-108行とはもともと別の詩であった。まず、1-22行に愛の序詞があるのに、45-50行で再び愛の序詞が始まっている。

これと同じことが、No. 16アルマッラール・ブヌ・ムンキズの95行よりなるカスィーダにおいても言える。この詩の1-52行と53-95行は2種の詩が合体したものである。イブン・クタイバはこのことに気づいていたようだが、後半は女性の美が主題であるのに、彼は主題を馬としていて、あきらかに間違いである。

従って、No. 26アブダ・ブヌ・アッタビーブによる81行のカスィーダが最も長いものと言える。しかし、50行以上の長い詩は、No. 26以下は No. 17アルムザリド (74行)、No. 126アブー・ズアイブ (65行)、No. 120アルカマ・ブヌ・アバダ (57行)、および No. 98ビシュル・ブヌ・アビー・ハージム (56行) の5編にすぎない。すなわち、5行から30行までの詩が大方を占めている。

本詩集のなかで短い断片詩は別として、カスィーダの大部分は、複数の小主題について語っている。模範的なのは、愛の序詞、ラクダや馬の旅、(鳥など他の野生動物の生態など)、戦闘や略奪、気前の良い者を褒め、食欲な者を蔑み、善には善で、悪には悪で返す。隣人や弱者を守り、借りたものは返すなども含まれる。また、ジャーヒリーヤ時代の特色として、マイシル (賭け矢)、酒宴、女性との享楽も含む。

なかでも、部族や部族連合軍による戦争は、主題の中核をなしている。このため、戦いの日 (アイヤーム・アルアラブ) は多くの詩に詠み込まれている。No. 17 アルムザリド75行は大半が、牡馬、雌馬、鎧、兜、盾、剣、槍などの武器を語っている。

No. 69 はハニーファのある女 (5行) が族長ヤジード・ブヌ・アブド・アッラーの死を悼んでいるが、一般的にいつて哀悼詩の多くは女性によって詠まれている。しかし、男性の詩人も哀悼詩を詠んでいる。No. 67 ムタンミンによる兄マーリクへの哀悼詩 (51行) は最も有名である。

本詩集には、犯罪を犯したなどにより部族から追放されたスウルク (su^lūk、複数 sa^līk) と呼ばれた一連の詩人達がいるが、No. 1 のタアップタ・シャッランと No. 20 のアッシャンファラー (36行) がよく知られている。後者は1-14行の序詞において、女性の貞節を見事に描いているとみなされている。彼らは一般に野生的生活や略奪や復讐戦、および危害への対応と孤独な将来の不安などを詠んでいる。

アラブのなかでは、フザイル部族のみが62名による部族詩集を残しているが、その大部分はムハドリム詩人達によるものである (A. Farrāj et al. [eds.], *Sharḥ ʿAshʿār al-Hudḥalīyīn*, 3 vols., Cairo, 1965)。フザイル族のカスィーダにおいては、愛の序詞、ラクダや馬の旅の部分が無いのが特色である。本詩集 No. 126 アブー・ズアイブ・アルフザリーは同部族の最も有名な詩人で、ウスマーンがカリフのころ (638-9) ペストが流行り、息子5名すべてを失った。このため、彼は息子の死、野生のロバおよび牡牛の死、勇士の対決について語り、死の不可避を説いている。

本詩集 (補遺を含む) 130編の韻律は、A.M. Shākir, A.M. Hārūn [eds.], *al-Mufaḍḍalīyāt*, al-Maʿārif, Cairo, 1962, p. 439 によると、

tawīl 調46編、kāmil 調26編、basīṭ 調19編、wāfir 調17編、mutaqārib 調9編、
sarīʿ 調5編、khafīf 調3編、ramal 調3編、munsariḥ 調3編

となっており、タウィール調、カーミル調、バシート調およびワーフィル調が好んで用いられていることが分かる。

さて¹⁷⁾、「アルムアッラカート」と「アルムファッダリーヤート」両詩集の日本語訳の完訳に際して、謝辞を述べたい。アラビア語入力が印刷業者にできるわけがなく、当初から藤井章吾、森口明美 (いずれも大阪大学)、岡崎英樹 (四天王寺大学) の各先生方にお世話になっていたが、2012年以降、私が脳梗塞など一連の病気におそわれ、かつ、失語症がひどくなったため、すべての草稿を近藤久美子先生 (大阪大学) に託していた。その後、関西アラブ研究会の皆さんの好意により、会長の高階美行先生 (大阪大学名誉教授) が草稿を監修する体制となり¹⁸⁾、原稿を整理し誤記と転写をチェックし、アラビア語と日本語の入力をしていただいている。さらには、大阪大学アラビア語専攻の歴代の外国人教師 (カイロ大学所属) 各位から数多くのご教示もいただいた。これらの多くの先生方に感謝を捧げる。

将来、試訳を終え、誤訳などを直し、両古詩集を完訳出来れば、これに過ぎるものはない。

2016年1月11日 池田 修

17) [校正者注：ここより末尾の署名まで、将来両古詩集の完訳を期し、その時のために訳者に書いていただいた文である。日付は当時のまま。]

18) [校正者注：近年では、新たに関西アラブ研究会世話人となった依田純和先生 (大阪大学) から強力な支援を得てきた。]

